

コミュニケーション能力を高める幼児英語教育のこれから

～幼稚園・保育園における英語教育の全国調査および先進園訪問を通して～

Increasing English Communication Ability : The Future of Early Childhood Education in Japan

～ A study of innovative early English education programs in Japan ～

松 永 道 子
小 松 義 隆
ルーク・ロバージュ

I はじめに

今般、幼稚園指導要領および保育所保育指針が全面的に改定され、実施されている。改定の背景の一つに人間関係の希薄さ・構築力の弱さ或はコミュニケーション能力の不足が指摘されている。

未来に生きる子ども達は、国際理解を深め、国際社会の一員として協調しながら良き関係を築く能力が求められる。幼稚園・保育園では、幼稚園指導要領および保育所保育指針には謳われていないが、園の特色教育として、概ね遊びを通した「英語遊び」によって『人間関係』と『言葉』領域を重ねた国際理解教育の一環として英語教育を行っていると思われる。

これからの子どもには『生きる力』として「PISA型学力」が求められている。学ぶ意味が分かり、学んだ知識を応用し、さまざまな心理的・社会的リソースを活用して、特定の複雑な課題に対応することができる力であり、具体的能力として「①社会・文化的・技術的ツールを相互作用的に活用する能力 ②多様な社会グループにおける人間関係形成能力 ③自立的に行動する能力」といわれている。

幼児期に英語教育を行う意義として、聴覚が発達するこの時期の柔軟な適応力を生かし、言葉に関する能力や国際感覚を体験によって養えるコミュニケーション能力の育成と考える。

幼稚園・保育園における英語教育の全国調査および先進幼稚園訪問を通して、幼児英語教育実情と課題を把握し、コミュニケーション能力を高める幼児英語教育あり方を検討した。

II 研究項目と研究方法

1. 幼稚園・保育園における英語教育の全国アンケート調査 360 カ園
 - (1) 英語教育の導入について (2) カリキュラムや教材について (3) 異文化教育について
 - (4) 指導者について外国籍 (5) 外国籍の在園児教育について
2. 先進園視察研修 1 幼児英語学習システム
3. 先進園視察研修 2 ネイティブ講師の役割と課題

III 研究内容と結果

1. 幼稚園・保育園における英語教育の全国アンケート調査
 - (1) 対象 (社)日本幼年教育会加盟および佐世保市内幼稚園・保育園の360カ園。
 - (2) 方法 調査用紙を日本幼年教育出版より郵送により発送して頂き、FAXにより回収。
 - (3) 回収概況 ①回収数 91園 回収率 25.3%

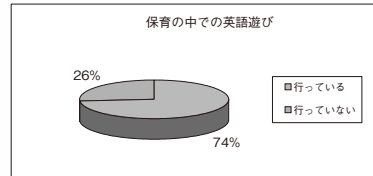
②回答園の内訳 幼稚園 80園（88%） 保育園 11園（12%）

2. 調査の結果

1) 英語教育の導入について

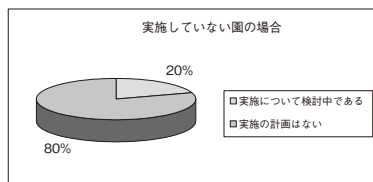
① 保育中の英語遊びなどの英語教育

行っている	67
行っていない	24
	91



② 英語あそびを実施していない園の場合

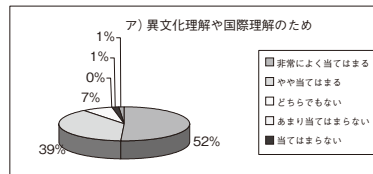
実施について検討中である	3
実施の計画はない	12
	15



③ 英語遊びを導入した目的

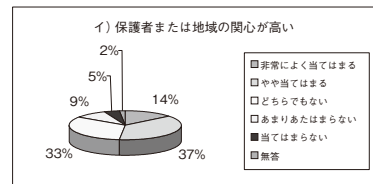
ア 異文化理解や国際理解のため

非常によく当てはまる	34
やや当てはまる	26
どちらでもない	5
あまり当てはまらない	0
当てはまらない	1
無答	1



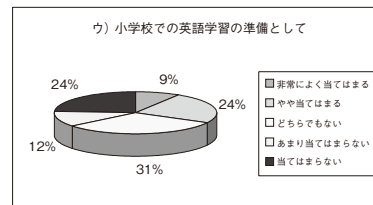
イ 保護者または地域の関心が高い

非常によく当てはまる	9
やや当てはまる	24
どちらでもない	21
あまり当てはまらない	6
当てはまらない	3
無答	1



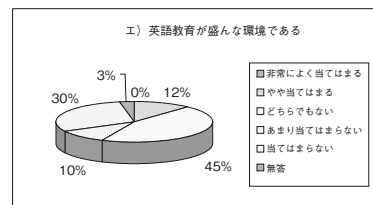
ウ 小学校での英語学習の準備として

非常によく当てはまる	6
やや当てはまる	16
どちらでもない	21
あまり当てはまらない	8
当てはまらない	16
無答	0
	67



エ 英語教育を行う園が多い環境である

非常によく当てはまる	0
やや当てはまる	8
どちらでもない	30
あまり当てはまらない	7
当てはまらない	20
無答	2
	67

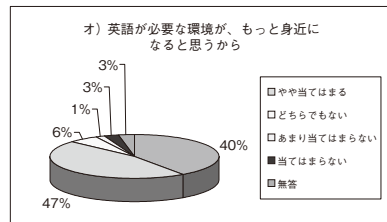


コミュニケーション能力を高める幼児英語教育のこれから

オ 英語が必要な環境が、将来身近になる

非常によく当てはまる	27
やや当てはまる	31
どちらでもない	4
あまりあてはまらない	1
当てはまらない	2
無答	2

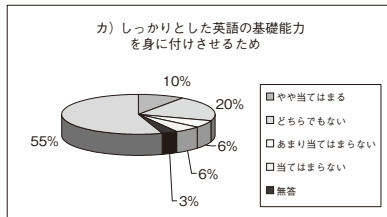
67



カ しっかりとした英語の基礎能力を身につけさせるため

非常によく当てはまる	12
やや当てはまる	12
どちらでもない	25
あまりあてはまらない	7
当てはまらない	7
無答	4

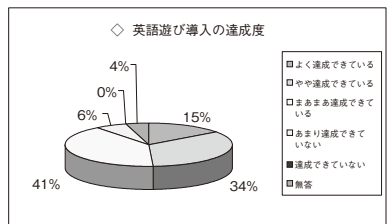
67



◇ 英語遊びを導入して目的の達成

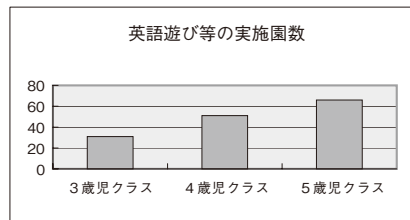
よく達成できている	10
やや達成できている	23
まあまあ達成できている	27
あまり達成できていない	4
達成できていない	0
無答	3

67

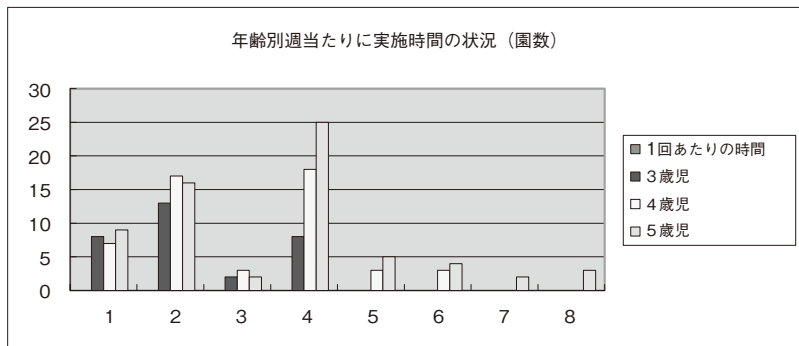


④ 英語遊び等の英語教育の実施年齢クラス

3歳児クラス	31	園
4歳児クラス	51	園
5歳児クラス	66	園



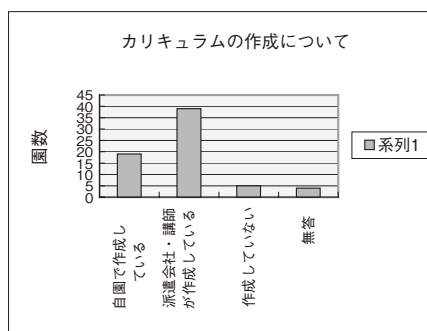
⑤ 実施年齢クラスの週当たりの時間数



2) カリキュラムや教材について

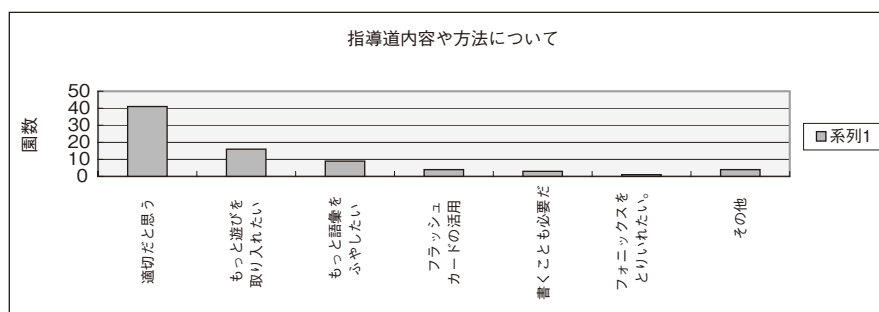
① カリキュラムの作成について

ア	自園で作成している	19
イ	派遣会社・講師が作成している	39
ウ	作成していない	5
エ	無答	4
		67



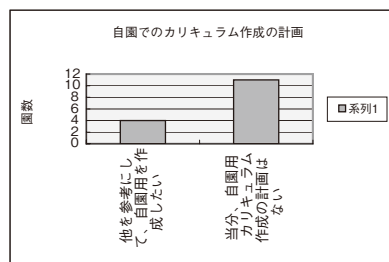
② 指導内容や方法について
(複数回答可)

ア	適切だと思う	41
イ	もっと遊びを取り入れたい	16
ウ	もっと語彙をふやしたい	9
エ	フラッシュカードの活用	4
オ	書くことも必要だ	3
カ	フォニックスをとりいれたい	1
キ	その他	4



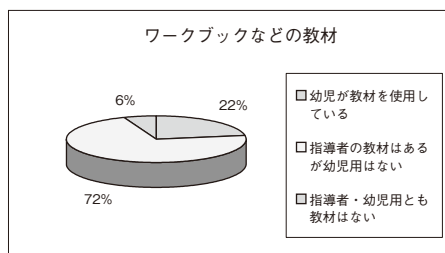
③ 英語遊びカリキュラムを作成していない園では

ア	他を参考にして、自園用を作成したい	4
イ	当分、自園用カリキュラム作成の計画はない	11



④ ワークブック・絵カードなどの教材

ア	幼児が教材を使用している	15
イ	指導者の教材はあるが幼児用はない	48
ウ	指導者・幼児用とも教材はない	4

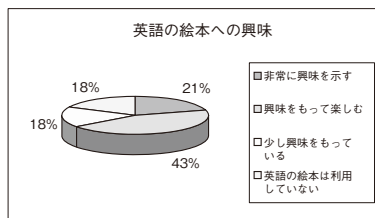


コミュニケーション能力を高める幼児英語教育のこれから

3) 異文化教育について

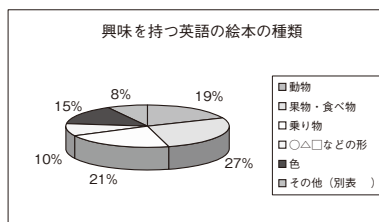
① 子ども達は英語の絵本に興味を示しますか

ア	非常に興味を示す	14
イ	興味をもって楽しむ	30
ウ	少し興味をもっている	12
エ	英語の絵本は利用していない	12



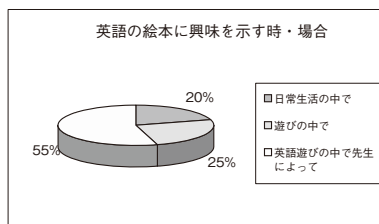
② どんな英語の絵本に興味を示しますか

ア	動物	25
イ	果物・食べ物	37
ウ	乗り物	29
エ	○△□などの形	13
オ	色	20
カ	その他(別表)	11



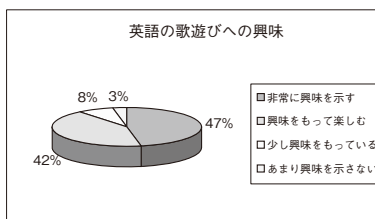
③ 英語の絵本に興味を示す場合

ア	日常生活の中で	9
イ	遊びの中で	11
ウ	英語遊びの中で先生によって	24



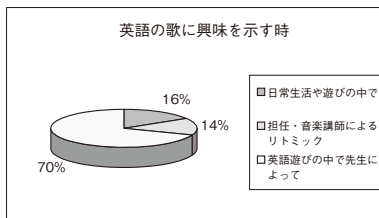
④ 英語の歌遊びへの興味

ア	非常に興味を示す	30
イ	興味をもって楽しむ	27
ウ	少し興味をもっている	5
エ	あまり興味を示さない	2



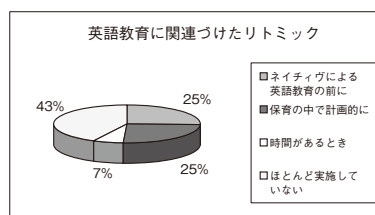
⑤ 英語の歌に「興味を示す時は

ア	日常生活や遊びの中で	15
イ	担任・音楽講師によるリトミック	13
ウ	英語遊びの中で先生によって	63



⑥ 英語教育に関連づけたリトミック

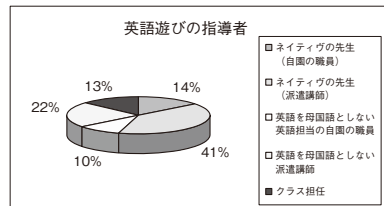
ア	ネイティブによる英語教育の前	15
イ	保育の中で計画的に	15
ウ	時間があるとき	4
エ	ほとんど実施していない	25



4) 指導者について

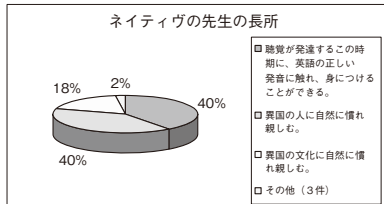
① 英語遊びの指導者はだれですか

ア	ネイティブの先生（自園の職員）	13
イ	ネイティブの先生（派遣講師）	36
ウ	英語を母国語としない英語担当の自園の職	9
エ	英語を母国語としない派遣講師	20
オ	クラス担任	12



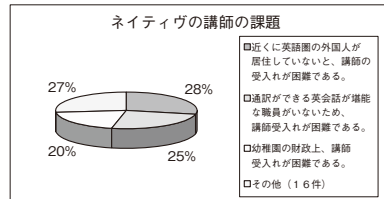
② ネイティブの先生はどんな点がよいと思いますか
（複数回答可）

ア	聴覚が発達するこの時期に、英語の正しい発音に触れ 身につけることができる	57
イ	異国の人に自然に慣れ親しむ。	57
ウ	異国の文化に自然に慣れ親しむ。	26
エ	その他（3件）	3



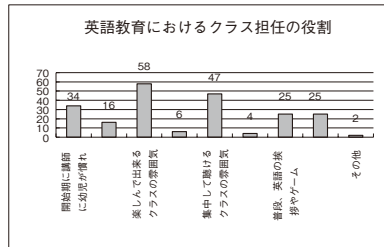
③ ネイティブの先生の課題

ア	近くに英語圏の外国人が居住していないと、講師の受入れが困難である。	17
イ	通訳ができる英会話が堪能な職員がいないため、講師受入れが困難である。	15
ウ	幼稚園の財政上、講師受入れが困難である。	12
エ	その他（16件）	16



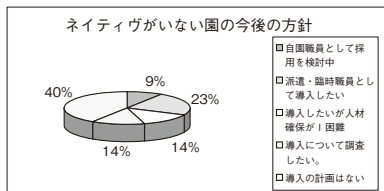
④ 英語教育におけるクラス担任の役割

ア	開始期に講師に幼児が慣れるよう援助する。	34
イ	必要に応じて通訳する。	16
ウ	楽しんで出来るクラスの雰囲気をつくる。	58
エ	英語の絵本などを整備する。	6
オ	集中して聴けるクラスの雰囲気をつくる。	47
カ	リトミックなどで心を柔らかくにする。	4
キ	普段、英語の挨拶やゲームなど行う。	25
ク	英語の時間前の健康観察や排便など行う。	25
ケ	その他	2



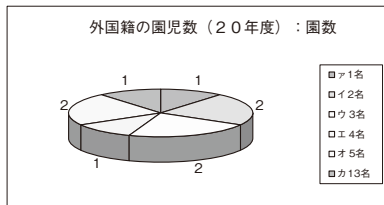
⑤ ネイティブの講師がいない園の今後の方針

ア	自園職員として採用を検討中	2
イ	派遣・臨時職員として導入したい	5
ウ	導入したいが人材確保が1困難	3
エ	導入について調査したい。	3
オ	導入の計画はない	9



5) 外国籍の園児数（20年度）

ア	1名	1
イ	2名	2
ウ	3名	2
エ	4名	1
オ	5名	2
カ	13名	1



Ⅳ 考察

1. 調査概況について、まず回収率 24.3%であり、非常に低かった。そのため、この調査の学術的価値は非常に低いが、回答していただいた幼稚園・保育園及び日本幼年教育会のご厚意に対し、アンケート調査をまとめ、考察をさせていただくこととする。

2. 各調査項目に対する考察

(1) 英語教育の導入について

回答いただいた園の 67%が導入していた。その目的として、異文化理解や国際理解とした園が 60%、英語が必要な環境が将来身近になるとした園が 58%に達している。次にしっかりとした英語の基礎能力をつけるが 24%、保護者当の関心が高いが 23%、小学校の英語学習の準備が 22%と続く。周りの園がやっているからは 8%となっている。熱心な園は、教育理念に基づく英語教育が導入されており、目的への達成度や英語教育の内容や時間数等の格差に繋がっている。

英語教育の開始年齢は 5 歳児からが最も高く、4 歳児開始がこれに次いでいる。講師招聘費用等、各園が置かれている状況の違いがあるので、熱意のみでは測れない面もあると考える。

1 コマの時間は 15 分から 25 分が多い。本来の保育や行事等の支障をきたさない範囲での実施は、短時間でも楽しんでスムーズに外国語に慣れる目的のためには意義があると考ええる。

(2) カリキュラムや教材について

カリキュラムの作成は派遣会社や講師が作成しているが 67 園中 39 園で 58%にあたる。自園作成も 19 園 28%あり、今後、情報交換や指導用機器の導入など、子どもの発達の特性に応じ、楽しんで英語を聴いたり、簡単な会話ができるカリキュラムの作成が課題となってくる。指導内容に関して「適切だと思う」が 41 園 61%であり、当面は現状のままで部分的な工夫改善が望まれる。教材は指導者のみが整備されており、適切な幼児用教材の研究開発が求められる。

(3) 異文化教育について

絵本は異国の文化や言葉の獲得に関することがらを、子どもの興味や発達に合わせて紹介でき、必須のものとして利用され、44 園 (66%) の子どもが興味を示している。果物>食べ物>乗り物>動物など、身の回りの生活で体験できる内容であるが、ことに英語講師によって高低が見られる。英語の歌遊びなども指導者の資質によってさらに高低が顕著になる。子どもが異文化をスムーズに受け入れる心を作るリトミックについては関心を高めることが課題と考える。

(4) 指導者について

ネイティブを職員として採用している園が 13 園 (19%)、派遣講師 36 園「54%」とを合わせると 49 園 (73%) となる。このように多く採用されている理由として、「聴覚が発達するこの時期に、英語の正しい発音に触れ身につけることができる」「異国の人に自然に慣れ親しむ」が挙げられている。将来、子ども達が国際社会の一員として活躍し、貢献できるような国際理解教育を進めていることが見えてくる。しかし、地域性、自園の通訳体制、経費の問題等の課題もある。ネイティブ講師とペアを組むクラス担任の役割として、「楽しんで学ぶクラスの雰囲気づくり」「集中して聴くクラスの雰囲気づくり」を挙げ、効果的な英語学習の環境の大切さと援助の必要を示唆していると考ええる。

(5) 外国籍の在園児教育について

まず、外国籍の在園児数であるが、地域による差が大きい。また同じ地域でも園による格差が大である。20 年度 17 名を受け入れている園は、英会話が堪能な副園長が外国籍園児の教育の中心となっており、行き届いた教育が実践されている成果と考える。

大阪幼稚園研修レポート ～英語学習システム、Cyber Dream との出会い～

英語科 小松 義隆

2008 年 9 月 17 日、18 日の 2 日間にわたり、大阪の先進的英語教育を導入している 2 園の幼稚園を訪問した。本研修旅行の主導者は近年幼児英語指導に関して研究を行われている松永道子先生。長崎短期大学英語科のルーク・ロページュ先生（カナダ）と幼児英語指導改善のための共同研究を行うとのことで、その通訳兼旅行の手配等のお手伝いをするということで、この研修旅行に参加させて頂いた。

大阪に到着後は松永先生と長年の交流のある、幼年教育出版（株）の柿本さんに移動などの多大なお世話を頂いた。訪問した幼稚園は堺市にある H 幼稚園（17 日）、茨木市にある S 幼稚園の 2 園（18 日）である。平日の忙しい最中、両園ともに暖かく迎えて頂き、日課を拝見することができた。どちらの園も仏教の教えに基づいた心の教育に重点を置き、日常の挨拶や感謝の心を大切にする指導が行き届いており、子どもたちとすれ違くと「こんにちは」という元気よく気持ちの良い挨拶が飛んできた。

移動の車中で柿本さんから「Cyber Dream」（2007 年 3 月販売開始）という英語教育システムの存在を伺った。何でも非常に簡単な操作でネイティブの先生の授業を受けているような効果が現れる機械だということだ。我々の大阪訪問時点までには全国各地の幼稚園、保育園、小学校約 60 校で 220 台の導入実績があるようだ。英語の苦手な先生でも苦勞なく授業が出来るという話に非常に興味を覚えた。

＜H 幼稚園＞ 所在：大阪府堺市

1 日目に訪問した H 幼稚園ではちょうど運動会の練習をしているところにお邪魔した。すぐに気づいたことであるが、園庭で走り回っている子どもたちの中にネイティブの教員が混じっており、英語で指示を出していた。マイケルさんというお名前前で H 幼稚園所属の専任の英語教諭だそう。その後、園長先生初め、副園長兼主任の T 先生、そして、国際クラスの M 先生と準備していただいた昼食を取りながらお話をした。H 幼稚園では英語に特化した国際クラスを設けている。責任者の M 先生は元国際線のフライトアテンダントをしていらっしゃるようで、英語も堪能、国際クラスの指導はもとより、全体の英語カリキュラムを作成しネイティブの先生と協力して効果的な英語の授業を考案している。

その後サニークラスという英語クラスの授業を拝見した。教室に入ると所狭しと英語の掲示物が張られていた。英語の絵本棚も英語の教材も充実しており、英語教育にかける情熱が伺い知れた。先ほどのマイケルさんが主に指導をし、日本人の教員が 2 名ついて園児たちの授業参加へのサポートをする形式である。英語での曜日の言い方を “There are seven days” を歌いながらリズムに乗って覚えたり、日付や月の言い方を練習。当日に誕生日を迎えた園児に “Happy Birthday! ～!” とお祝いを言いながら名前のローマ字綴りを覚えたり、国旗を見せながら国の名前を覚えたり、それぞれの国の特徴を表す動作（例えばブラジルならサッカーの真似）を交えながら体を使って学習したり、関連付けて相手の出身国を訪ねる表現の練習。園児たちをペアにして、会話のやり取りの出来た順

に座らせてスピードを競わせる遊びなどが行われていた。

突然訪問した我々に興味津々で、なかなか授業に集中できない子どもたちもいたが、常に " Eyes on me! " や " Please be quiet " などの日常表現を取り混ぜながら、また園児達自身に復唱させながら、全員の注意を引く指導をしていた。子どもたちの注意を引き、集中を持続させるのは本当に難しいことであるが、マイケル先生は一人一人の名前を呼び注意を払い、非常によく指導をしていた。日本人の教員と一緒に授業に参加しながら目の届かないところのサポートをし、実に良い共同作業が行われていた。残念ながらこの日は Cyber Dream と呼ばれる機械にお目にかかることは出来なかったが、子どもたちが本当に生き生きと、歌やペアワークやゲームを通して英語によるコミュニケーションを行っていた。マイケル先生は専任で常に子どもたちと触れ合っている為、一人一人の名前を覚えており、密接なコミュニケーションをとることが出来、子どもたちとの信頼関係が出来ている様子がよく伺えた。また、M 先生という英語クラスのコディネーターの存在、一緒にクラス経営に当たる日本人スタッフの存在、相互の役割についての了解が日常のコミュニケーションを通してしっかり取れていることの重要性を感じた。

< S 幼稚園 > 所在：大阪府茨木市

2 日目に訪問した S 幼稚園は近代的で彩りも鮮やかな建物だった。副園長の S 先生に案内をして頂いたが、まだ 20 代半ばの元気と若さあふれる方だった。早速案内されたクラスで cyber dream を使った授業を拝見することが出来た。この幼稚園にもネイティブの専任の先生がおり、ちょうど果物の名前のレッスン中であつた。はじめは果物の模型を見せながら英語の発音をしたり、写真のカードを黒板に張り出し、園児を一人ずつ前に出して好きな果物のカードを選ばせて持たせ " I like ~. " のような表現を練習していた。

その後液晶テレビとそれに繋がった小さな箱型の機械がテレビ棚に乗って登場した。園児達がテレビの前に集合し、始まるのをとても楽しみに待っている様子が見て取れる。機械を起動するのは殆ど時間を取らずに極めてスムーズに起ち上がった。操作は極めて簡単で、バーコードの載ったシート (A 3 サイズ) をスキャナーで読み取るだけである。すると画面に写真が現れるという仕組みである。バーコードシート 1 枚には約 500 語の単語が載っており、フラッシュカード 500 枚の量とその中から使用したいカードを探す手間を考えれば非常に便利なのは言うまでも無い。シートももちろん複数、様々なジャンル別、レベル別に存在する。さらにコンテンツのバージョンアップも可能であるらしい。普通のフラッシュカードとの違いは、映し出される画面の美しさである。きわめて精彩に富み、子どもの視覚に訴え、惹きつけるような画面であつた。またバーコードをスキャンして出るのはもちろん写真ばかりではなく、動画や CG アニメーションも見ることが出来、発音もはっきりとしたネイティブのものを聞くことが出来る。Cyber Dream 開発者のブルース・ウィットレッド氏の発音であるようだ。さらにバーコードを組み合わせて使うことにより、 " What's this ? " のような質問が流れた後に写真が表示され、園児達はその名前を答えた後に、さらに正解の発音を聞くことが出来る。音声や映像を伴うと、通常早送りや、巻き戻しなどの待ち時間ができたり、操作に手間取り時間のギャップが必ず出るが、Cyber Dream は反応が瞬時に出来るため、間延びすることなくテンポよく、学習することが出来る。前日の幼稚園でも感じたことだが、子どもたちの集中を切らせることなく継続させるのは難しい。その点迅速な反応が得られる Cyber Dream が非常に有用な点だと感じた。

その後日本人の先生が同機を使用している授業を拝見したが、こちらにもネイティブの先生がして

いた授業にまったく遜色なく、とてもテンポよく進められていた。中にはシルエットクイズのように、子どもたちの好奇心を刺激するようなものも入っていたり、単語の綴りが画面に現れ、園児達に答えさせた後で正解の写真と発音が出るようなクイズもあった。このクラスには外国人の園児も混じっており、常時英語に触れている分、スベルに関しては一日の長があり、積極的に発言をしていた。周囲の園児達の注目も浴び少し得意気にしているところが微笑ましかったが、まだ日本語になれていない外国人の子女にとっても、存在をアピールする場にもなっているのではないかと感じた。

最後には突然の訪問した私達に英語の歌を披露してくれた。” Twinkle Twinkle Little Star. (きらきら星)” を歌っていただき、その発音のきれいさには驚かされた。Cyber Dream には英語の歌も多く入っており、カラオケ機能もついているようである。とにかく英語に慣れていない日本人教員でもオリエンテーションを受け、指導法を学べば容易に利用できる教材であると感じた。システムを採用した施設には希望に応じて講師を派遣して指導するサービスも行われているようである。準備も片付けも手際よく行うことが出来るので、10分でも15分でもそれぞれの日課の中に取り入れることが出来、毎日ネイティブの英語に触れることが出来る。また専用のケースに入れて簡単に移動できるので、1台あれば複数のクラスで利用することも可能である。残念ながら実際に手にとって使ってみる機会は無かったが、多くの発展的学習の可能性を秘めた英語学習システムであると感じた。値段は1台48万7千円、月額約1万円でのリースも行っているようである。

以上英語学習に力を入れている幼稚園を訪問させていただき多くのことを学ぶことが出来た。特に両園に共通して存在したネイティブの専任の先生が存在、日本人スタッフとの共同作業がうまくいっていることに感銘を受けた。Cyber Dream という最先端の学習システムを知ることが出来たのも大きな実りであった。扱いの便利さ、容易さは日本人教員の授業を大いに手助けし、負担を軽減するだろう。子どもたちの視聴覚に訴える内容と、発展的学習の可能性には素晴らしいものがあると感じた。Cyber Dream の長所ばかりを述べてきたが、敢えて短所というか、不安事項を述べるとするならば、今まで述べてきたように、児童に視覚、聴覚などを通して刺激を与えることにより、飽きさせることなく英語学習をする機械であるが故に、子ども達が何か刺激がないと学習が出来なくなる、または集中力が維持できなくなるのではないかということである。例えば黙って本を読んだり、文章を書いたり、ノートを取ったりということが出来なくなるのではないか、ということが一抹の不安として残る。しかしあくまで英語学習に関して、特に幼児期においてはストレス無く入れるという点において、またその他の長所も含め総合的に判断すると、現代のニーズ（コミュニケーションに特化した英語学習）に即した効果的な英語学習システムであると言えるだろう。

最後に、実りある研修旅行に参加させて頂いたことに感謝を申し上げ、レポートを終わらせていただく。

Cyber Dream のお問い合わせ先 幼年教育出版株式会社
住所：大阪府東大阪市新庄 3-22-2 TEL：06-6744-9001

コミュニケーション能力を高める幼児英語教育のこれから



大阪府堺市H幼稚園国際クラス 年中・年長専属の複数のネイティブ教員



茨木市S幼稚園 Cyber Dream を使った授業



左：ネイティブ教員 右：日本人教員

Improving English Education and School Status at K Kindergarten

Luc Roberge

Over the last year, Mrs. Matsunaga has been doing research on how to improve English Education at the Kindergarten level. It is well documented that language learning and 2nd language acquisition is highest at a young age and especially so in the window that is the Kindergarten age group.

This presentation will discuss one way in which K- Kindergarten could improve English Education and also, simultaneously improve the status of the school.

One way to immediately improve any English Education program is to hire qualified, experienced and motivated staff members to teach English. K- Kindergarten could do this by adding a full-time Native English teacher to its staff.

Currently, K- Kindergarten hires part-time Native English Teachers. They come to school once a week and provide 20 minute lessons.

The following will describe some of the advantages and disadvantages of having a full-time Native English teacher as part of the teaching staff. It will then discuss some of the challenges associated with doing so. Finally, it will make some recommendations on how to make it a possibility. Before going on any further, it is conceded that the following advantages and disadvantages are completely dependant on the ability of K- Kindergarten to find an appropriate person to fill the position. This will be discussed in some detail at the end.

The following information is based on observations of 2 Osaka Kindergartens which are widely accepted to have successful English programs. It also includes opinions expressed by Native English teachers at these Kindergartens, from current Japanese Kindergarten staff at the 2 Osaka Kindergartens, by part-time teachers who have taught at K Kindergarten, and K Kindergarten Japanese staff. Furthermore, this takes into consideration the opinions of some of the American families that have children enrolled at K-Kindergarten .

Perceived advantages of having a full-time Native English Teacher

-Better relationships between students and NE teacher

- ▷ Having a NE Teacher at the school on a full time basis could possibly create an environment where students are more comfortable with the English teacher this would foster more trust and a deeper bond. This could lead to better learning for the students.
- ▷ Simultaneously, the English teacher would be better equipped to know the needs of the students thus enabling the teacher to teach to those needs.

-Better Curriculum

- ▷ A full time staff member would have more time to develop an effective English curriculum
- ▷ More time to discuss curriculum with other staff members and Administration
- ▷ Ability to incorporate English Curriculum into more activities, not only 20 minute lessons, once per week.

-More Consistency

- ▷ A full time teacher would be better equipped to maintain consistency in classroom management, lesson delivery etc.

-Better access to Teacher

- ▷ Having a teacher at the school on a full-time basis would allow Administration, other staff members and students to have more frequent and continuing access to the NE teacher versus

only on a limited basis.

- ▷ Students would have more opportunities to interact with an Native English speaker

-Improved Communication

- ▷ Better Communication between English Teacher and Administration
- ▷ Better Communication between English Teacher and other staff
- ▷ Better Communication between school staff and American Children that are not fluent in Japanese.
- ▷ Better Communication between Japanese and American (English Only) families
- ▷ English teacher could communicate more effectively with American parents through letters, parent teacher meetings and direct contact.

-Decreased Stress on Japanese Staff

- ▷ Would decrease stress related with needing to communicate effectively with part-time teachers and American families that are not Fluent Japanese speakers.

-Could possibly aid increasing the numbers of American families willingness to enroll their children by reducing some of the communication gaps that cause frustration and apprehension

- ▷ There is a high need for good quality, financially competitive day care for working American families that can not be provided by the American Navy

-Would provide an opportunity for new programs

- ▷ The NE teacher's expertise may allow for the teacher to organize cultural events
- ▷ NE teacher could teach an English immersion class which could be composed of solely American children or American and Japanese students

-Advertising

- ▷ Adds credibility to the school to have a full-time Native English teacher and this could be used when advertising the school.

Perceived Disadvantages

-Increased Cost of hiring another full time staff member

- ▷ benefits, housing cost, travel, advertising, recruiting etc

-Decreased Japanese staff

- ▷ to adjust for increased cost of hiring a NE teacher

-Staff communication

- ▷ Some difficulties may increase by having a teacher that can not fully communicate in Japanese

-Differing Cultural teaching philosophies may exist

-Consistency

- ▷ Finding a teacher who is willing to stay for more than one year. High NE teacher turnover

-Increased Administration and staff workload

- ▷ Advertising, recruiting, interviewing, training new staff etc.
- ▷ Creating roles and responsibilities for new position
- ▷ possible staff, class and current system modification

Considerations for hiring a full-time Native English speaking teacher

- Teacher must be able to effectively communicate with all staff. It is suggested that a full-time English Teacher would need to be able to communicate well, at least verbally, in Japanese.
- Native English teacher would have to feel as part of the school. On equal terms with other Japanese staff.
- This person would not only teach English but would have other responsibilities such as translating, curriculum development, activities monitoring, supervising and running of other activities
- Roles and responsibilities need to be clearly defined and communicated.
- Time Allowance for inter-staff planning, collaborating etc within staff work schedule
- Remuneration
 - ▷ Competitive pay may be slightly higher than Japanese staff

Recommendations for hiring a Full-Time English Teacher

- If K-Kindergarten decides to hire a full-time English teacher to join their staff, the following may aid in making the process as effective as possible.
 - ▷ Attempt to hire someone who lives in Japan and who has had prior English Language teaching experience with companies such as JET, GEOS, NOVA, AEON etc. This would be beneficial for the following reasons:
 - ▷ May reduce transportation costs by eliminating airfare from the teacher's contract.
 - ▷ Higher probability that the individual will be proficient in Japanese
 - ▷ The individual will be more acclimatized to life and Japan and may be less likely to leave mid contract

In conclusion, advantages and disadvantages to having a full-time English teacher at K-Kindergarten have been discussed. Fiscally, hiring a foreign national or Native English speaker to teach at K-Kindergarten may initially increase school fiscal costs. However, possible increased enrollment and an improved English teaching environment may make it advantageous.

V まとめ

本研究における全国アンケート調査の回答園に関しては、英語教育の導入についてその目的として、異文化理解や国際理解とした園、英語が必要な環境が将来身近になるとした園が大半であった。「しっかりと英語の基礎能力をつける」、「保護者の関心が高い」、「小学校の英語学習の準備」等は少数である。熱心な園ほど教育理念に基づく英語教育が導入されており、目的への達成度や英語教育の内容や時間数等で高レベルとなっている。

本来の保育や行事等の支障をきたさない範囲での実施は、1回20分程度の短時間でも楽しんでスムーズに外国語に慣れる目的のためには意義があると思う。英語教育の開始年齢は5歳児からが最も高く、4歳児開始がこれに次いでいる。講師招聘費等、各園が置かれている状況の違いがあるので、熱意のみでは測れない面もある。

カリキュラムの作成は派遣会社や講師が作成しているのが大半である。自園作成は少なく、子どもの発達の特性に応じ、楽しんで英語を聴いたり、簡単な会話ができるカリキュラムの作成が課題となってくる。前述のCyber Dreamは長年幼児英語講師をされた方が経験を生かして作られたカリキュラムと指導方法が一体化して洗練された発音によるソフトが入っており、コンピューターシステムと組み合わせ、バーコードを使って「学びたいところ」「教えたいところ」を瞬時に呼び出せる点、英語講師の採用が困難な地域の英語教育を支援する教育機器だと思う。

異文化教育については、絵本は異国の文化や言葉の獲得に関することから、子どもの興味や発達に合わせて紹介でき、必須のものとして利用され、6割の子どもが興味を示している。子どもが異文化をスムーズに受け入れる心を作るリトミックについても関心を高めることが課題である。

指導者については、ネイティブを職員・派遣講師を合わせると回答園の7割となる。このように多く採用されている理由として、「聴覚が発達するこの時期に、英語の正しい発音に触れ身につけることができる」「異国の人に自然に慣れ親しむ」が挙げられている。将来、子ども達が国際社会の一員として活躍し、貢献できるような国際理解教育を示唆している。通訳体制、経費の問題等の課題もある。ネイティブ講師とペアを組むクラス担任の役割として「楽しんで学び、集中して聴くクラスの雰囲気づくり」を挙げ、効果的な英語学習の環境と援助の必要を提示している。

外国籍の在園児教育については、2006年日本生まれの新生児の30人の1人は、親の一方が外国人であることが、厚労省の調査で判明した。早晩、幼稚園教諭・保育園保育士の英語の会話力が求められる時代となろう。25年度から高等学校の英語授業は英語で行われ、幼稚園教諭・保育士の会話力も高くなり、幼児の英語教育は一般的になるであろう。

未来に生きる子ども達は、豊かな体験により感性を育み、一方で英語（外国語）によるコミュニケーション能力を高め、国際社会の一員として協調しながら共生関係を築けることを期待している。

謝意

本調査のご協力いただいた（社）日本幼年教育会、日本幼年教育出版株式会社、各保育園・幼稚園、先進園視察を御快諾いただいた境市H幼稚園、茨木市S幼稚園に深く感謝申し上げます。

参考文献

- 「コミュニケーションスキルの発達と診断」(2004. 3) B. バックレイ
「絵本と音楽などによるバイリンガル教育の実践」(2005.7) アメリカ・グリニッジ学園園長 山本 薫

- 「PISAショック ～学力は保育で決まる～」(2005.8) 辻井 正
「音と画像で英語学習～幼児向けシステム機発売」(2007. 11) 河北新聞
「日本生まれの赤ちゃんの30人の1人は、親の一方が外国人」(2008.8) 長崎新聞
「小学校外国語活動（地域人材の活用）」子ども英語（2008.8）文部科学事務次官 銭谷真美
「英語ノート開発のねらい」日本教育新聞（2009.2）文部科学事務次官 菅 正隆